

NAVIFY® Tumor Board



多くのスタッフが関わる
エキスパートパネルにおいて、
均質化に寄与するシステムを求めた。

VOICE of EXPERT

Vol.3

大阪国際がんセンター 医学博士
遺伝子診療部 部長
がんゲノム診療科 部長

杉本 直俊 先生

大阪エリアにおける「がんゲノム医療」の中心的役割を果たす、大阪国際がんセンター。多くのスタッフが関わり実施されるエキスパートパネルにおいて、必要とされるソリューションとは何か。同施設の「がんゲノム診療科」部長である杉本直俊先生に「NAVIFY Tumor Board」導入以前の課題と、システム導入により改善されたことについてお話を伺った。

個人の負担を減らしながら、
情報共有の質を改善したいと
思っていました。

—— がんゲノムパネル検査の実施状況についてお聞かせください。

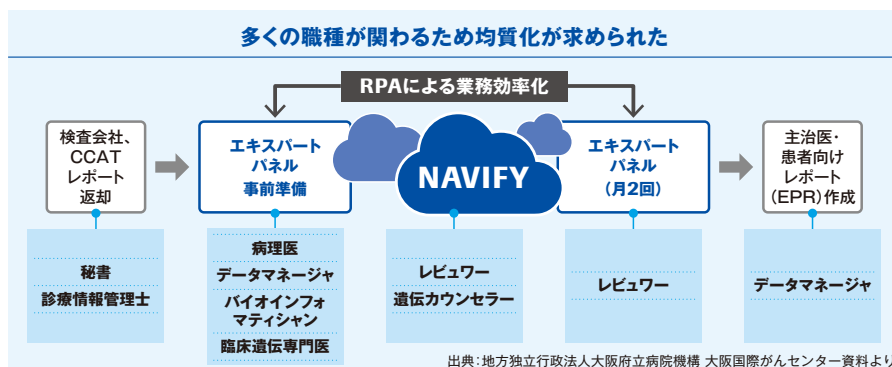
当センターは、2019年9月にがんゲノム医療拠点病院に指定されました。エキスパートパネルは同年12月から月2回の開催、2021年度は390件です。また、2020年度からは大阪府内の2つのがんゲノム医療連携病院、国立病院機構大阪医療センター、私立東大阪医療センターとの連携も始まっています。

—— エキスパートパネルにおける課題や負担とは、どのようなものでしょう。

当センターでは複数レビュワー制*をしいており、合計9名のレビュワーで構成されています。

エキスパートパネルでは各々がプレゼンするため、個人の負担は軽減できますが、その反面、情報共有や情報の均質化には課題が残っていました。また、エキスパートパネルの準備にあたり、C-CATレポートとパネルのレポートから収集したデータは、多職種が確認するために統一されたフォーマットで表現する必要があります。そのプロセスは転記作業が多くを占め、正確性、

効率性が求められていました。さらに、レポートについても、以前は検索内容や記載内容のばらつきが生じており、情報共有の遅れや齟齬により、完成までの日数が長くなる欠点があったのです。また、エキスパートパネルの件数が増えるにつれ、再調査のニーズもあり、これまでの個人が作成するやり方では情報共有が不十分で、過去分のデータは手打ち作業に頼る状態でした。



*複数レビュワー制：遺伝子診療部を兼任する医師が、アノテーション、治療方針検討、エキスパートパネル当日の症例報告を担当する仕組み



レビュワーが本来の役割に 集中できる環境を 構築することができました。



—— NAVIFY® Tumor Boardを導入して改善されたことについて、お聞かせください。

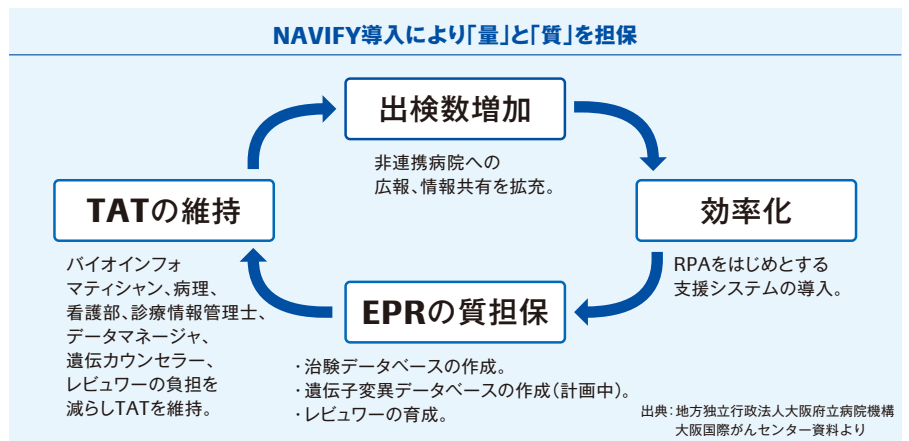
NAVIFYはクラウドベースのシステムなので、多職種が同時に入力・閲覧可能です。その結果、エキスパートパネルまでのお互いの情報共有が容易になりました。また、統一されたフォーマットに入力するため、担当者個人による違いが生じにくく、均質化に役立っています。それは、プレゼン資料作成時間の短縮にも寄与していて、導入前は一例あたり1.6時間を要していましたが、NAVIFY導入後はおよそ0.8時間に短縮できています。

また、RPA*により決められたフォーマットに必要なデータが自動入力されるので、効率化とともに、誤記や記入漏れなどのミスが低減されました。さらに、エキスパートパネル会議前には、NAVIFY上の統一されたフォーマットでプレゼンテーションスライドを確認することができ、参加者の意識向上にも貢献しています。

当センターでは、主治医報告書、患者報告書のテンプレートを開発し、RPAを用いてNAVIFYに入力した最終結果を各報告書に転記できる仕組みを追加で開発しました。これにより、煩雑な作業はスタッフにお任せでき、レビュワーは本来の役割に集中できる環境を構築することができました。

また、パネル検査時のエキスパートパネルで

は登録可能な治験が見つからなかった場合でも、治験検索機能を活用することで、数カ月後に新たな治験が見つかる可能性があります。NAVIFYにより入力したデータが構造化されており、そのデータを活用して新しく承認された薬剤で、効果が期待できる患者さんを迅速に洗い出すことができます。



*RPA(Robotic Process Automation)：データ入力サポートソリューション

—— レビューや連携病院の反応についてお聞かせください。

レビュワーからは、「二重入力の手間が減った」「治験検索など、本来の業務に専念できる



ようになった」「治験情報検索ツールのひとつとしてのクリニカルリアルマッチが使いやすい」「他のレビュワーのプレゼン資料の閲覧が容易となり、自身のレポートの質向上、均てん化に役立った」といった意見を聞いています。

連携病院とのやりとりにおいても、本クラウド上でエキスパートパネルレポートやプレゼン資

料の閲覧が可能になったので、施設間の情報共有が容易になったことが挙げられます。

—— 今後、NAVIFY Tumor Boardに期待したいことについて、お話しください。

エキスパートパネルの件数は今後も伸び続けることが予想されます。それに伴い、その運用方法も改善、効率化が求められます。NAVIFYの現行のプレゼンテーションモードも、その変わりゆく日本のエキスパートパネルの実情に、より近づけたカスタマイズを続けていただくことを期待しています。

また、RPAについても、今後は過去分のデータの振り返りにより、治験情報の再検索をより積極的に行っていき、臓器別のゲノム情報のデータベースの利活用を考えていきます。さらに、二次的所見のデータベースの作成や利活用を考

えており、研究面においてもさらに詳細なゲノム情報の利活用を検討しています。

大阪国際がんセンター

自治体病院として初めて「特定機能病院」の承認を受け、先進的な高度医療を提供。2019年には「がんゲノム医療拠点病院」に指定され、大阪府内の2つの連携病院と共に「がんゲノム医療」の発展に尽力し、地域におけるがん診療機能の中心的な役割を担っている。



写真提供元：大阪国際がんセンター



ロシュ・ダイアグノスティクス株式会社 〒108-0075 東京都港区港南1-2-70
カスタマーソリューションセンター ☎0120-600-152 <http://www.roche-diagnostics.jp>